

II 特用作物

1. てん菜

(1) つきさっぷ (E-6)

来歴 「つきさっぷ」は1955年(昭30)北海道農業試験場で「導入2号」の集団を母体として、早熟、多収、耐病性品種の育成に着手し、1960年(昭35)に合成した。

1961年(昭36)日本てん菜振興会てん菜研究所に移管し、「E-6」の系統名で3カ年にわたり北海道立農業試験場各支場とともに育成系統生産力検定試験を行い、1964年(昭39)優良品種に決定し、農林省に新品種「つきさっぷ」(てん菜農林合3号)と命名、登録された。

特性概要 1.形態的には「導入2号」に比べ、根形がやや胴張円錐形で、露肩がやや多いほかはおよそ以ている。

2.初期生育が良好である。

3.根重は極めて多いが、根中糖分はやや低い。

4.熟期は晩生で、褐斑病に強い。

栽培適地と奨励態度 北海道の南部、中央部およびその他の褐斑病多発地域に適応する。

なお、栽培法は「導入2号」に準ずる。(1975年(昭50)廃止)

試験場名	10a 当り		根中糖分	純糖率	試験年次	栽培法
	根重	可製糖量				
てん研	4.25	520	14.01	87.7	1961~1963	直播
渡島支場	4.85	770	17.60	90.5	1962~1963	"
上川支場	4.21	-	-	-	"	"
十勝支場	3.79	572	16.61	90.8	1961~1963	"
北見支場	3.28	471	16.10	85.9	"	"
根室支場	2.71	319	15.45	81.0	1963	" 褐斑病無防除
宗谷支場	2.57	390	17.55	85.9	1962~1963	" "
天北支場	3.05	448	16.75	86.6	"	" "

注) 可製糖量は、根重×根中糖分×純糖率

(2) ポリラーベ(Polyrave)

来歴 「ポリラーベ」はオランダのファンデルハーベ種子会社が育成した倍数体品種である。

1957年(昭32)より北海道農業試験場で、また1959年(昭34)以降は北海道立農業試験場の各支場で試験された結果、1962年(昭37)1月の北海道農業試験会議では地域を限定して栽培を認め、1963年(昭38)には約7,000haの栽培があった。また1963年(昭38)には全道31カ所の

品種現地試験でも地域性を検定し、1964年(昭39)1月北海道農業試験会議において、「てん菜の優良品種決定に関する案」により認定品種¹⁾となり、同年3月適応地帯を限定して優良品種²⁾に認定し原名から「ポリラーベ」と命名した。

注) 1), 2)についてはカーベエルタ, エージェーポリ-1, カーベポリの3品種が同じ取扱いである。

特性概要 1. 2倍体, 3倍体, 4倍体の混合集団で、いわゆる倍数体品種である。

2. 草丈がやや低く、葉姿は開平型である。

3. 抽苔耐性は強いが、褐斑病抵抗性は極めて弱い。

4. 根型は胴張り短円錐形で分岐根が少ない。

5. 早熟性で根部肥大が早い。

6. 葉根収量は「導入2号」に比べ極めて多いが、根中糖分は中位である。

栽培適地と奨励態度 「ポリラーベ」は褐斑病に弱いが発生が少ない場合には根重、可製糖量ともに「導入2号」より勝るから、網走、十勝の褐斑病発生の少ない地帯、およびこれに準ずる地帯に適する。

なお栽培法は「導入2号」に準ずるが、褐斑病防除の徹底を期すること。

試験場名	褐斑病防除	10 a 当り		根中糖分 %	純糖率 %	試験年次	栽培法
		根重	可製糖量 kg				
北海道農試 てん研	無防除	3.76	483	14.33	88.67	1959~1963	直播
	防除	3.95	536	15.14	89.04	"	"
渡島支場	無防除	4.48	673	16.56	90.80	1959	"
	防除	4.88	834	18.58	91.98	"	"
上川支場	防除	4.17	—	—	—	1959, 1963	"
十勝支場	無防除	3.80	505	14.57	90.44	1959~1962	"
	防除	3.86	560	15.80	90.95	1959~1963	"
北見支場	無防除	2.81	391	16.12	87.35	1959~1961	"
	防除	30.3	460	16.95	89.90	1959~1963	"
根室支場	無防除	2.76	418	16.62	89.93	"	"
	防除	3.45	521	16.19	93.33	1959	"
宗谷支場	無防除	2.43	396	17.82	90.59	1959, 1961, 1963	"
	防除	3.49	—	—	—	1959	"
天北支場	無防除	3.17	461	15.31	91.88	1959, 1961	"
	防除	4.52	696	16.91	91.11	1954	"

(3) カーベエルタ(Kaweerta)

来歴 「カーベエルタ」は、西ドイツのクラインワンツレーベン種子会社が育成した2倍体品種である。北海道では大正末期より昭和初期まで「クラインワンツレーベン」の品種名で一般栽培されたが、「本育48号」、「本育192号」の育成によってその姿を消した。

その後、北海道農業試験場では「KL-E」の品種名で、1953年(昭28)より再び試験され、ま

た北海道立農業試験場各支場においても、1955年(昭30)頃から品種地帯別適応性検定試験で、断続的ではあるが試験された。なおこの間1959年(昭34)に品種名が「KW-E」と改名され、1963年(昭38)には現地試験でも検定され、根釧および道北地方で1,700haの一般栽培があったが、1964年(昭39)適応地帯を限定した優良品種に認定された。

さらに1965年(昭40)「KWS-E」と改名され、1972年(昭47)3月原名が「Kaweerta」と改訂されたことにともない、「カーベエルタ」と命名した。

以上のように「カーベエルタ」は、何度も改名された古い品種であるが、常に改良が加えられ特性が更新されている。

特性概要 1. 2倍体品種である。

2. 草丈はやや低く、葉姿は開平型である。
3. 抽苔耐性は強く、褐斑病抵抗性も極めて強い。
4. 根形は短円錐形で分岐根が少ない。
5. 早熟性で根部肥大が早い。
6. 菜根収量は「導入2号」に比べ極めて多く、根中糖分は中位である。

栽培適地と奨励態度 「カーベエルタ」は褐斑病には弱いのが、発生が少ない場合には根重、糖分、可製糖量ともに「導入2号」に勝ることから、根釧、宗谷、留萌地区および十勝、網走の褐斑病発生の少ない地帯に適する。

なお一般栽培法は「導入2号」に準ずるが、褐斑病に弱いので栽培に当っては防除の徹底を期すること。

試験場名	褐斑病防除	10 a 当り		根中糖分 %	純糖率 %	試験年次	栽培法
		根重 kg	可製糖量				
北海道農試 てん研	無防除	3.01	397	14.34	88.66	1959~1963	直播
	防除	3.53	499	15.72	88.89	1959~1960 1962~1963	
上川支場	防除	4.10	-	-	-	1959, 1963	"
十勝支場	無防除	3.66	490	14.96	89.77	1959~1960	"
	防除	3.75	576	16.56	89.60	1959~1963	
北見支場	無防除	2.37	369	17.40	89.20	1959~1960	"
	防除	2.88	461	17.83	90.05	1959~1960 1963	
根室支場	無防除	2.94	471	17.60	89.51	1959~1960 1962~1963	"
	防除	3.28	522	17.15	92.85	1959	
宗谷支場	無防除	2.86	466	17.94	89.85	1959 1962~1963	"
	防除	3.58	583	17.55	92.70	1959	
天北支場	無防除	3.59	541	17.15	86.94	1959, 1963	"
	防除	4.05	708	18.78	92.99	1959	

(4) エージェーポリ-1(AJ poly-1)

来歴 「エージェーポリ-1」はポーランドのアレクサンダーヤナシ種子会社が育成した倍数

体品種である。1960年（昭35）より北海道立農業試験場北見支場でまた1961年（昭36）より、日本でん菜振興会てん菜研究所および北海道立十勝農業試験場で試験され、1963年（昭38）1月北海道農業試験会議において地域を限定して栽培が認められた。1963年（昭38）には約1,500haが栽培され、また各支場の品種適応性検定試験および現地試験で確めた結果、1964年（昭39）「ポリラーベ」と同じ取り扱いにより、適応地帯を限定した優良品種に認められ、原名から「エージェーポリー1」と命名した。

特性概要 1. 2倍体，3倍体，4倍体が混合している倍数体である。

2. 草丈はやや高く，葉姿はやや開平型。
3. 抽苔耐性が強く，褐斑病抵抗性は「導入2号」より弱く「ポリラーベ」より強い。
4. 根は肩張り短円錐形で分岐根が少ない。
5. やや早熟性。
6. 菜根収量は適地においては「導入2号」より多いが，地域により差が大きい。
7. 根中糖分は「導入2号」より高い。

栽培適地と奨励態度 「エージェーポリー1」は褐斑病にはやや弱いが，収量は適地において「導入2号」にまさるから，網走管内の紋別，遠軽地区およびこれに準ずる地区に適する。

なお一般栽培法は「導入2号」に準ずるが，褐斑病防除を徹底する。また他の品種より種子が大きく発芽が悪いから，播種量を10a当たり2.5kgとする。（1978年（昭53）廃止）

試験場名	褐斑病防除	10 a 当り		根中糖分	純糖率	試験年次	栽培法
		根重	可製糖量				
てん研	無防除	2.48	338	15.29	89.49	1961～1963	直播
	防除	2.77	398	15.96	89.01	1962～1963	
上川支場	防除	3.31	—	—	—	1963	—
十勝支場	—	2.81	456	17.59	91.99	1961, 1963	—
北見支場	無防除	2.41	363	16.61	86.79	1960～1961	—
	防除	2.81	456	17.96	90.21	1960～1963	
根室支場	無防除	2.52	416	18.34	88.25	1962～1963	—
宗谷支場	—	2.18	340	18.49	84.61	1963	—
天北支場	—	2.92	415	17.27	82.26	—	—

(5) カーベポリ (Kawepoly)

来歴 「カーベポリ」は西ドイツのクラインワンツレーベン種子会社が育成した倍数体品種である。

1956年（昭31）より北海道農業試験場で「KL—polybeta」の品種名で試験され、また1959年（昭34）より北海道立農業試験場北見支場、十勝支場でも断続的に試験された。この間「KW—polybeta」と改名されたが1964年（昭39）優良品種に認定された。

その後1965年（昭40）「KWS—polybeta」と改名され、さらに、1972年（昭47）原名が「Kawepoly」と改訂されたことにとともに、原名から「カーベポリ」と命名した。

- 特性概要 1. 2倍体, 3倍体, 4倍体の混合集団で倍数体品種である。
2. 草丈が低く, 葉姿は開平型である。
 3. 耐抽苔性は強いが, 褐斑病抵抗性が弱い。
 4. 根形は短円錐形で分岐根が少ない。
 5. 早熟性である。
 6. 「導入2号」より菜根取量が多く, 根中糖分も高い。

栽培適地と奨励態度 「ガーベポリ」は褐斑病には弱い, 発生が少ない場合には根重, 糖分, 可製糖量ともに「導入2号」にまさるから, 根釧地区, 十勝, 網走の褐斑病発生の少ない地帯およびこれに準ずる地帯に適する。

なお一般栽培法は「導入2号」に準ずるが, 褐斑病防除の徹底を期すること。

試験場名	褐斑病防除	10 a 当り		根中糖分	純糖率	試験年次	栽培法
		根重	可製糖量				
てん研	無防除	3.37	401	13.91	85.33	1962~1963	直播
	防除	3.32	440	15.16	87.44	"	"
十勝支場	無防除	4.02	630	17.10	91.72	1962	"
	防除	3.68	590	17.44	91.62	1961~1963	"
北見支場	無防除	2.07	344	18.14	91.78	1959	"
	防除	2.85	477	18.36	90.81	1959, 1963	"
根室支場	無防除	2.31	329	17.02	83.62	1963	"

(6) 台糖1号 (台糖1号)

(7) 台糖2号 (台糖2号)

(8) 台糖3号 (台糖3号)

来歴 「台糖1号」, 「台糖2号」, 「台糖3号」は台糖株式会社道南製糖所が, 北海道大学, 北海道農業試験場, てん菜研究所の指導のもとに, 1960年(昭35)から「導入2号」の集団を母体として母系統の選抜を始め, 1962年(昭37)にそれぞれ15~20系統を選抜し合成したものである。1963~1964年(昭38~39)に北海道立道南農業試験場とてん菜研究所で生産力検定試験を行った。

その結果, 「導入2号」に比べ褐斑病抵抗性が極めて強く, かつ高取性で根中糖分もやや高いことから, 道南地域を対象に1965年(昭40)優良品種に決定し, 系統名と同じ「台糖1号」, 「台糖2号」, 「台糖3号」と命名された。

特性概要

「台糖1号」

1. 葉姿, 葉色, 根形などは「導入2号」とほとんど同じであるが, 草丈はやや高い。
2. 熟期は「導入2号」並である。
3. 頸葉重, 根重が多く, 特に頸葉重が多い。
4. 根中糖分が高い。
5. 褐斑病抵抗性は「導入2号」に比べ著しく強い。

「台糖2号」

1. 特性は「台糖1号」とほとんど同じである。
2. 褐斑病抵抗は「導入2号」より強いが、「台糖1号」より幾分弱い。

「台糖3号」

1. 特性は「台糖1号」、「台糖2号」とほとんど同じであるが、熟期は「台糖1号」、「台糖2号」に比べ幾分早い。
2. 褐斑病抵抗性は「導入2号」に比べるとはるかに強いが、「台糖1号」、「台糖2号」よりやや弱い。

栽培適地と奨励態度 「台糖1号」：根重、可製糖量、頸葉重ともに「導入2号」よりまさり褐斑病抵抗性はすこぶる強いので、道南地域の褐斑病多発の低台地帯に適應する。

「台糖2号」・「台糖1号」と同じ傾向であるから、道南地域の一般低台地帯の適品種である。

「台糖3号」・「台糖1号」、「台糖2号」と同じ傾向であるが、両品種に比べると、わずかではあるが褐斑病抵抗性が劣るので、道南地域の高台地帯に適應する。(1975年(昭50)廃止)

品 種 名	試 験 場 名	10 a 当 り		根中糖分	純 糖 率	試 験 年 次	栽 培 法
		根 重	可製糖量				
台糖1号	て ん 研	2.72	340	14.50	86.3	1963~1964	直 播
	道 南 農 試	3.51	526	16.50	90.3	"	"
台糖2号	て ん 研	2.92	364	14.47	86.3	1963~1964	直 播
	道 南 農 試	3.39	513	16.75	89.6	"	"
台糖3号	道 南 農 試	2.99	458	16.70	91.9	1964	直 播

(9) てんけん1号 (T 1002)

来歴 「てんけん1号」は1960年(昭35)よりてん菜研究所で、製糖会社およびホクレンと共同して、「導入2号」、「A j-4」、および「US401」から3代選抜した系統と、1961年(昭36)より北海道立十勝、北見、根釧農業試験場との共同の下に「導入2号」から温室を利用して3代選抜した系統とを1964年(昭39)に合成したものである。1965年(昭40)以降、「T1002」の系統名で全道各地で系統適応性検定試験、奨励品種決定基本調査および、奨励品種決定現地調査ならびに現地比較試験を行った。この間、毎年構成系統の組合せ能力検定試験を行い、一部系統の組換を行った。

以上の経過をたどり、1968年(昭43)優良品種として決定し、1969年(昭44)農林省に新品种「てんけん1号」(てん菜農林合6号)と命名、登録された。

特性概要 1. 一般外部形態は「つきさっふ」に類似しているが、地上部の生育は旺盛で、頸葉重多い。

2. 根形は「つきさっふ」と同じ長円錐型である。
3. 初期生育は良好で、根重が極めて多い。
4. 根中糖分は「つきさっふ」より高い。
5. 褐斑病抵抗性が強い。

6. 熟期は晩生種に属する。

栽培適地と奨励態度 本品種は「つきさっぷ」とおきかえ、特に北海道の道南、道央およびその他の褐斑病多発地域に適する。

なお栽培法は「つきさっぷ」に準ずる。(1978年(昭53)廃止)

試験場名	10 a 当り		根中糖分 %	純糖率 %	試験年次	栽培法
	根重 t	可製糖量 kg				
てん研	4.39	564	14.74	86.6	1965~1967	直播
中央農試	4.63	605	15.16	85.6	"	"
上川農試	4.02	585	17.12	85.4	"	"
十勝農試	3.89	552	16.26	87.0	"	"
北見農試	3.73	539	16.84	85.8	"	"
根釧農試	3.25	407	15.84	80.0	"	1965~1966 直播 1967 移植
天北農試	3.30	445	15.88	84.9	"	直播
天北農試 (天塩支場)	3.90	586	17.02	88.3	1967	"
道南農試	5.48	851	17.88	86.9	"	"
滝川畜試	3.90	586	17.02	88.3	"	"

(10) キタマサリ (支7号)

来歴 「キタマサリ」はてん菜研究所支所(熊本県)で、1963年(昭38)より「カーベエルタ」(昭和47年KWS-Eを改名)から選抜した系統、1961年(昭36)より「Hilleshög R」から選抜した系統、および鹿児島県農業試験場と共同して、1963年(昭38)より「Hilleshög R」から選抜した系統を1967年(昭42)に合成したものである。「支7号」の系統名で1968年(昭43)には主として道東、道北地方の試験場を中心に、1969年(昭44)以降は全道の系統適応性検定試験を行い、また育成系統現地検定試験を行って地域適応性を確かめ、1971年(昭46)優良品種に決定し、農林省に新品種「キタマサリ」(てん菜農林合7号)と命名、登録された。

試験場名	10 a 当り		根中糖分 %	純糖率 %	試験年次	栽培法
	根重 t	可製糖量 kg				
てん研	5.35	730	15.74	86.7	1968~1970	直播
道南農試	4.71	584	14.57	85.1	1969~1970	"
中央農試	3.98	499	14.09	86.3	"	"
上川農試	3.66	534	16.52	87.9	"	"
十勝農試	4.70	718	17.06	89.3	1968~1970	"
北見農試	4.21	571	15.83	85.4	"	"
根釧農試	4.27	569	16.57	80.6	"	移植
天北農試	3.61	520	16.53	87.0	"	直播

- 特性概要 1.「キタマサリ」は2倍体の多胚品種である。
- 2.草丈は低く、頸葉重は他の品種に比べて少ない。
 - 3.当年抽苔はなく、早生型である。
 - 4.褐斑病には弱い。
 - 5.糖分はやや低く「ポリラーベ」並みであるが根重が多く、特に根釧、天北および、十勝、北見の一部で良い成績を示した。

栽培適地と奨励態度 根釧、天北地方ならびにこれに準ずる地帯に適する。

なお褐斑病に対する抵抗性が弱いので、栽培にあたっては防除の徹底を期すること。

(II) ソロラーベ(Solorave)

来歴 「ソロラーベ」はオランダのファンデルハーベ種子会社が育成した、3倍体の単胚品種である。

1967年(昭42)にホクレンが輸入し、てん菜研究所および北海道立十勝、北見農業試験場の3カ所で系統適応性検定試験に供試し、1968~1970年(昭43~45)には全道各試験場の系統適応性検定試験に供試した。また1970年(昭45)には道南、道央を除く地域の18カ所の育成系統現地検定試験で検定し、北海道における最初の単胚実用品種として、1971年(昭46)優良品種に決定し、原名から「ソロラーベ」と命名した。

- 特性概要 1.3倍体の単胚品種である。
- 2.草丈は中間で、葉姿は開平型である。
 - 3.当年抽苔は少なく、熟期は早生である。
 - 4.根形は円錐で、露肩が多く、分岐根は少ない。
 - 5.褐斑病抵抗性は弱い。
 - 6.根重、根中糖分は「ポリラーベ」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 道東、道北などの褐斑病の発生の少ない地帯および、これに準ずる地帯に適し、省力を目的とした機械化栽培に好適である。

なお褐斑病に弱いので、栽培にあたっては防除の徹底を期すること。

試験場名	10 a 当り		根中糖分 %	純糖率 %	試験年次	栽培法
	根重 t	可製糖量 kg				
てん研	4.72	646	15.80	86.2	1967~1970	直播
道南農試	4.31	542	14.67	85.7	1969~1970	"
中央農試	4.61	606	15.09	86.2	1968~1970	"
上川農試	4.04	590	16.56	87.6	"	"
十勝農試	4.32	669	17.24	89.4	1967~1970	"
北見農試	3.56	487	16.05	85.2	"	"
根釧農試	3.76	512	16.70	81.6	1968~1970	移植
天北農試	3.23	463	16.53	86.7	"	直播

(12) カーベメガモノ(Kawemegamono)

来歴 「カーベメガモノ」は西ドイツのクラインワンツレーベン種子会社が育成した倍数体の単胚品種である。

1966年(昭41)「KWS—Monobeta」の品種名で輸入され、1968年(昭43)まで道内各試験場の系統適応性検定試験で検定した結果、糖分型ではあるが根重は低かった。

その後日本甜菜製糖株式会社とクラインワンツレーベン会社との共同で、多数の系統を検定した結果、多収型の「KWS—Monobata」に組換えられ、1969年(昭44)から3カ年間、再び系統適応性検定試験を行った。この間数回品種名の変更があったが、1970年(昭45)に「kawemegamono」と改正された。なお1970～1971年(昭45～46)には全道各地の育成系統現地検定試験でも検定し、1972年(昭47)優良品種に決定し、原名から「カーベメガモノ」と命名した。

特性概要 1.倍数体の単胚品種である。

- 2.草丈はやや低く、葉姿は開平型である。
- 3.根形は短円錐で、露肩は中程度、分岐根は少ない。
- 4.当年抽苔はほとんどなく、熟期は早生である。
- 5.褐斑病に対する抵抗性は弱く、「カーベポリ」と同程度であり、葉腐病については「カーベポリ」、「ポリラーベ」、「ソロラーベ」と同程度である。
- 6.根重はやや多収性で、「ソロラーベ」と同程度であるが、地域によっては多少劣るところもある。
- 7.根中糖分は「ソロラーベ」よりやや高いが、「カーベポリ」よりはやや低い。

栽培適地と奨励態度 根釧地方を除く道東および道北地方などの褐斑病発生が少ない地帯、ならびにこれに準ずる地帯に適し、移植および直播の省力栽培に適する。

なお本品種は褐斑病に対する抵抗性が弱いので、栽培にあたっては防除の徹底を期すること。またこの品種は「カーベポリ」に比べて、糖分がやや低いから、ちっ素肥料の多用、株立本数の減少および褐斑病多発などによる糖分低下を防止すべきである。

試験場名	10 a 当り		根中糖分 %	純糖率 %	試験年次	栽培法
	根重 kg	可製糖量 kg				
てん研	4.59	672	16.08	86.6	1969～1971	直播
道南農試	4.37	571	15.17	85.6	1969～1970	"
中央農試	3.91	508	14.93	87.1	"	"
上川農試	3.74	541	16.89	85.8	1969～1971	"
十勝農試	4.09	641	17.50	90.3	"	"
北見農試	3.58	519	16.79	86.4	"	"
根釧農試	3.40	452	16.90	78.8	"	移植
天北農試	2.82	405	16.55	87.4	"	直播

(13) モノヒル(Monohill)

来歴 「モノヒル」はスウェーデンのヒレスヘーグ種子会社が育成した3倍体の単胚品種である。1970年(昭45)に北海道糖業株式会社が輸入し、同社とてん菜研究所で輸入品種特性検定

試験を行ったところ、単胚品種の中では特に良い成績を示した。そこで、1971年（昭46）にはてん菜研究所および北海道立十勝、北見農業試験場の系統適応性検定試験に供試し、翌1972年（昭47）には道内各試験場で系統適応性検定試験を、また同時に27カ所の育成系統現地検定試験にも供された。

なおこの間てん菜研究所においては、褐斑病抵抗性特性検定試験ならびに生育特性調査を行い1973年（昭48）優良品種に決定し、原名から「モノヒル」と命名した。

特性概要 1. 3倍体の単胚品種である。

2. 草丈はやや低く、葉姿は開平型である。
3. 根形は円錐形で露肩は中程度で、分岐根は少ない。
4. 当年抽苔は殆どなく、熟期は早生である。
5. 褐斑病抵抗性は弱い。
6. 根重は多収型で、「ソロラーベ」や「カーベメガモノ」より多い。
7. 根中糖分はやや低く、「ソロラーベ」や「カーベメガモノ」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 主として道東などの褐斑病の発生の少ない地帯、およびこれに準ずる地帯に適し、移植および直播の省力栽培に適する。

なお本品種は、褐斑病に対する抵抗性が弱いので、栽培にあたっては防除の徹底を期すること。

試験場名	10 a 当り		根中糖分	試験年次	栽培法
	根重	糖量			
てん研	5.01	788	15.76	1970~1972	直播
中央農試	6.35	1,039	16.36	1972	移植
上川農試	4.05	684	16.84	"	直播
十勝農試	4.41	759	17.23	1971~1972	"
北見農試	4.66	759	16.43	"	"
根釧農試	4.37	693	15.85	1972	移植
天北農試	3.49	519	14.86	"	直播

注) 糖量=根重×根中糖分

(14) モノホープ (T 1013)

来歴 「モノホープ」は、てん菜研究所で「TK76mmCMS」を種子親とし、1963年（昭38）より欧州系倍数体品種から選抜した、4倍体多胚系統「T 4 n—38」を花粉親として交配した3倍体単胚の一代雑種である。種子親は1961年（昭36）より「導入2号」の細胞質雄性不稔系統と2倍体単胚系統(Tmm—1)から育成した2倍体単胚細胞質雄性不稔系統と、1965年（昭40）より育成した(Tmm—14)に由来する2倍体単胚O型系統との交配により育成したものである。

以上のように育成した一代雑種「T1013」を、1970年（昭45）てん菜研究所十勝現地選抜班（芽室町）で、系統適応性検定予備試験に供試し、翌1971年（昭46）から全道の試験場において系統適応性検定試験、また1972年（昭47）には全道27カ所の育成系統現地検定試験で地域性を確かめた。国産第1号の単胚品種として、1973年（昭48）優良品種に決定し、農林省に新品

種「モノホープ」(てん菜農林交8号)として命名、登録された。

特性概要 1.3倍体の単胚品種である。

2. 草丈は中間で葉姿は開平型で草勢が旺盛である。
3. 根部は円錐形で、露肩および分岐根が少ない。
4. 当年抽苔はほとんどない。
5. 初期生育が良く、糖分の蓄積はやや早い、後期の根部肥大の速度がやや鈍く、熟期は中生型である。
6. 褐斑病に対する抵抗性は強く、欧州系の単胚優良品種に比べてすこぶる強い。
7. 根重は多収性で、「ソロラーベ」並かそれよりやや高く、「カーベポリ」並である。
8. 糖分はやや高糖性で、「ソロラーベ」および「カーベメガモノ」より高く「カーベポリ」と同程度である。

栽培適地と奨励態度 全道一円に適応する。特に褐斑病抵抗性および高糖性などを考慮して、道央および道南において適応性がきわめて大きい。

なお本品種は単胚であるから、移植ならびに直播における省力栽培に適する。育苗、プランタ播種および一般栽培法は「ソロラーベ」、または「カーベメガモノ」に準じてよい。

採種に当っては、発芽不良種子の混入する割合がやや多い傾向があるので、精選のとき発芽不良種子を除去するよう特段の留意が必要である。

試験場名	10 a 当り		根中糖分	試験年次	栽培法
	根重	糖量			
てん研	4.81	767	15.85	1971~1972	直播
現地選抜班 (芽室)	4.02	682	16.94	1970~1972	"
中央農試	6.33	1,093	17.27	1972	移植
上川農試	4.60	800	17.41	1971~1972	直播
十勝農試	4.26	719	16.87	1972	"
北見農試	4.22	713	17.04	1971~1972	"
根釧農試	3.76	645	17.23	"	移植
天北農試	4.26	719	16.87	1972	直播

2. 薄荷

(1) おおば (27-104)

来歴 岡山県立農業試験場倉敷はっか分場において、1953年(昭28)に「M.spicata」×「M.arvensis」の選抜系統「24-24」を母とし、「三美」を父として交配したものである。1958年(昭33)に北海道農業試験場(作物部薄荷除虫菊研究室)が譲りうけて「27-104」の系統名で1959年(昭34)から生産力を検定し、地域適応性の結果も良好であったので、1961年(昭36)優良品種に決定し、農林省に新品種「おおば」(薄荷農林4号)と命名、登録された。

特性概要 1. 草丈は「まんよう」よりも高く生育はきわめて旺盛で葉も大きい。倒伏性は茎が太く硬いので草丈の高い割合には強い。

2. 着蕾期～開花始は9月中～下旬で「まんよう」と大差なく、耐病性（さび病）や耐寒性（地下茎多）は「まんよう」よりも強い。

3. 生草重や取卸油重は「まんよう」に比べてはるかに多いが、取卸油の採脳率は低い。

4. 脱脳油の香味性は「まんよう」よりも良好と考えられている。

栽培適地と奨励態度 「まんよう」に準じて網走管内に適する。

1. 植付量が少ないと「まんよう」ほどではないがやはり減収し、倒伏もし易くなるから秋植えの種根は150～200kg/10 aは必要である。

2. 「おおば」は「まんよう」に比べ肥料の吸収力が強いので「まんよう」の標準肥程度以上の施肥が肝要である。少肥栽培すると地力の低下が大きいものと推定される。輪作栽培の一層の強化や地力維持に努めることが特に肝要である。

3. 「おおば」は「まんよう」より耐病性がやや強いが、さび病の抵抗性が次第に弱まり、多発するおそれがあるから、さび病に対する薬剤防除とともに畑の衛生保持を励行すべきである。

試験場名	開花始	刈取期における			10 a 当り			採脳率	試験年次
		草丈 cm	分枝数 本	葉数 枚	生草重 kg	取卸油重 kg	収油率 %		
北海道農試 (遠軽研究室)	9月中旬	116	46	524	4,563	8.74	0.192	48	1959～1960
北見支場	9月下旬	127	35	576	5,775	8.79	0.152	47	1960

(2) ほうよう（北交8号）

来歴 1959年（昭34）に北海道農業試験場（作物部はつか除虫菊研究室）において、「*Mentha spicata* var. *Crispa*」を母とし、高脳分の和種はつか系統「31—81」を父として人工交配したものである。1960年（昭35）から実生を養成し選抜を重ね、1962年（昭37）より「北交8号」の系統名で生産力や特性検定とともに地域の適応性も検定し、多収性が認められたので、1965年（昭40）優良品種に決定し農林省に新品種「ほうよう」（薄荷農林5号）と命名登録された。

特性概要 1. 葉は紡錘形でねじれ、葉巾は広い。葉面積は大きく、しかもチリメン状をなしており葉縁は鋸歯状に鋭く切れ込んでいる。葉色は鮮緑で葉柄は極めて短い。草型は直立型で茎はやや太く硬い。茎色は赤紫色で毛茸はなく地下茎は太い。花序は輪散花序に近いが、花の着生部の葉は小さく花色はやや淡い。

2. 着蕾始は8月末前後で中生種に属する。耐倒伏性は極めて強く、耐寒性は「おおば」と同程度で強く、種根量も多く、さび病の被害は少ない。葉の含油率が高いので対生草収油率が極めて高く、取卸油重は「おおば」に比べ極めて多収であるが、採脳率は54%前後でやや低い。脱脳油の香味は良好である。

栽培適地と奨励態度 北海道の和種はつか栽培地帯一円に適する。特に耐倒伏性が強く、高収率で刈取期間も長く、機械化栽培に好適である。

多肥栽培しても倒伏のおそれは少ないが、疎植すると減収率がやや高い。早刈や遅刈による減収が比較的少なく、刈取期間が長い刈取り適期は着蕾期前後の9月上旬である。本品種は

「まんよう」型のさび病菌系におかされ、生育後期になるとさび病の発生が多くなる傾向があるので、さび病の防除はこれまでどおり行ない、さび病の被害などの多い際には既存品種と同様に、多少早目に刈取る必要がある。(1978年(昭53)廃止)

試験場名	着蕾始	刈取期における			10 a 当り				採脳率	試験年次
		草丈	分枝数	葉数	生草重	乾草重	取卸油重	収油率		
北海道農試 (遠軽研究室)	8月29日	cm	本	枚	kg	kg	kg	%	%	1962~1964
北見農試	9月4日	113	38	323	4,160	1,360	11.96	0.29	54	
		116	31	239	3,150	1,044	8.32	0.26	52	1963~1964

・着蕾期を示す。

(3) あやなみ (北交 12号)

来歴 1961年(昭36)に北海道農業試験場(作物第2部特用作物第2研究室)において、和種はっか系の極高脳分系統「さんびS₁~1」を母とし、スペアミント系の野性種「*Mentha spicata* var. *crispa*」(別号オレンジハッカ)を父として人工交配したものである。1962年(昭37)より実生を養成して「36-323」の系統番号で選抜をかさね、1965年(昭40)より「北交12号」の系統名で生産力や特性を検定し、1968年(昭43)優良品種に決定し、農林省に新品種「あやなみ」(薄荷農林7号)と命名、登録された。

特性概要 1. 葉形は長紡錘形で頂部の葉がややねじれ、葉面積は中程度で葉数が極めて多く、葉茎比も高く、数はやや深く葉色は濃緑で葉柄は短く、葉脈は淡赤紫色を程する。草姿は扇状型で分枝は開張し、茎はやや太くて硬く、茎色は赤紫色で毛茸は少なく地下茎は太い。花序は偽輪繖花序で花色は濃い。染色体数は2n=72である。

2. 着蕾始は8月末前後、開花始は9月中旬前後で「ほうよう」と同じく中生種に属し、やや短程で耐倒伏性が極めて強い。また、種根量も極めて多い。さび病の被害は現状では認められず、ピンセンチュウの被害も既存品種よりも少ない。

含油型の品種で収油率が著しく高く、「ほうよう」に比較して生草重はやや多い程度であるが、収油量は20~25%の増加が見込まれる。採脳率は51%前後の中脳分品種であるが、脳油の香味はよく脱脳油の物理化学性や香味性は「あかまる」に近く、 α -イソメントンが少ないので、「ほうよう」の脱脳油のように、施光度や比重が薬局法にふれる恐れはない。

栽培適地と奨励態度 適地は北海道の和種はっか栽培地帯一円で、現在作付されている「ほうよう」を全面的に置きかえてよい。さび病・倒伏・線虫などの障害に強い安定多収型の品種で、和種はっかとしては連作適応性が高く、はっかの集団栽培に適し、耐倒伏・極高収油率で刈取期間も長く機械化栽培にも適する。

試験場名	着蕾始	刈取期における			10 a 当り				採脳率	試験年次
		草丈	分枝数	葉数	生草重	乾草重	取卸油重	収油率		
北海道農試 (遠軽研究室)	月、日 8.30	cm	本	枚	kg	kg	kg	%	%	1965~1967
		95	35	421	2,870	960	12.03	0.42	51	
北見農試	9.1	86	27	350	2,688	—	8.23	0.31	47	1966~1967

注) 北見農試の着蕾始の項は着蕾期である。

草姿が扇状型なので疎植しても減収率が低いが、種根量が多い割合には頂芽が少ないので、種根は多めに植付ける必要がある。現在圃場でのさび病の被害はみられないが、接種試験を行うとA、B、C、Dのレース群には抵抗性で、Eレース群の一部の菌には罹病するので、さび病の防除は従来どおり行なうことが大切である。

(4) わせなみ (北系J15号)

来歴 1967年(昭42)に北海道農業試験場(作物第2部特用作物第2研究室)において「さんび」の自殖第2代の極高脳分系統「J36-334」を母とし、スペアミント系の野生種「*Mentha spicata* var. *crispa*」を父として人工交配したものである。1968年(昭43)より実生を養成して「J42-99」の系統番号で選抜をかさね、1970年(昭45)より「北系J15号」の系統名で生産力や特性の検討と現地における大型現地試験(10a単位)で安定多収性が確認された。1973年(昭48)優良品種に決定し、農林省に新品種「わせなみ」(薄荷農林9号)と命名、登録された。

- 特性概要**
1. 葉型はやや小さくて細長く皮針形、いわゆる柳葉型で、葉色は淡緑で葉数は極めて多い。
 2. 草姿は扇状型で、分枝はやや開張して「ほうよう」と「あやなみ」の中間で、茎はやや太く硬い青茎で、草丈は「あやなみ」より低く、短程で耐倒伏性は強い方である。
 3. さび病、ピンセンチュウにも抵抗性は強く「あやなみ」と同程度以上である。
 4. 着蕾始めが8月上旬～8月中旬、開花始が8月中旬～9月上旬で早生種に属する。
 5. 極高収油率、多収型で取卸油収量は「あやなみ」に比べ2～3kg/10a多い。
 6. 採脳率は47%前後で中脳分品種である。

栽培適地と奨励態度 適地は北海道の和種はっか栽培地帯一円であるが、現在機械化向品種「ほうよう」が約30%作付されていてさび病の罹病性も高くなってきており、和種はっか収量向上の阻害要因となっているので「ほうよう」と全面的に置きかえる。また主要品種の「あやなみ」についても50%程度置きかえたい。

連作栽培する場合には「あやなみ」と同様に連作栽培技術の基本を励行することが肝要である。

試験場名	着蕾始 月.日	刈取期における			10 a 当り				採脳率 %	試験年次
		草丈 cm	分枝数 本	葉数 枚	生草重 kg	乾草重 kg	取卸油重 kg	収油率 %		
北海道農試 (遠軽研究室)	8.9	79	37	989	3.150	990	15.65	0.50	47	1970～1972
北見農試	8.20	102	22	286	4.610	—	14.50	0.32	46	1971～1972

(5) さやかぜ (北系J16号)

来歴 1968年(昭43)に北海道農業試験場(作物第2部特用作物第2研究室)において「あやなみ」の染色体倍化系統「あやなみ4倍体」を母とし、和種系の高脳分、高収油率系統「北系J10号」を父として人工交配したものである。1969年(昭44)より実生を養成して「J43-380」

の系統番号で選抜をかさね、1971年（昭46）より「北系J16号」の系統名で生産力および特性の検定を行った。1975年（昭50）優良品種に決定し、農林省に新品种「さやかぜ」（薄荷農林10告）と命名、登録された。

特性概要 1.着蕾始は8月下旬で中生種の晩に属す。

2.草丈は「あやなみ」と「わせなみ」の中間程度で、さび病の抵抗性は強、耐倒伏性と耐線虫性（ピンセンチュウ）は中程度で、種根量も多い。

3.生草重は「あやなみ」や「わせなみ」よりも多く、取油量も「わせなみ」と同様高いため、取卸油の収量は「あやなみ」に比較して20%前後、「わせなみ」に比較しても5%前後の増収が見込まれる。

4.採脳率は55%前後で、「あやなみ」や「わせなみ」に比べ6～8%高く、はっか脳の商品的評価テストにおいても一般的に良好である。

栽培適地と奨励態度 中生種の晩に属し、多収高脳分で刈取期間も長いことから全道の和種はっか栽培地帯一円で「あやなみ」に置きかえうる。

収穫期間の延長による収穫機や蒸留施設の効率的利用などの面から早生多収の「わせなみ」を基幹品種とし、この品種を組合せることが肝要であり、はっかの主作地帯では「あやなみ」に置きかえて30～40%作付されることが望ましい。耐倒伏性が中程度なので、多肥栽培は避けたいほうがよい。

試験場名	着蕾始	刈取期における			10 a 当り				採脳率	試験年次
		草丈	分枝数	葉数	生草重	乾草重	取卸油重	収油率		
北海道農試 (遠軽研究室)	8.23	91	33	597	4,020	1,090	18.00	0.45	55	1971～1974
北見農試	8.26	108	28	347	4,410	—	13.00	0.30	54	1972～1974

3. 除虫菊

(1) わっさむ (26 S-6-1)

来歴 北海道農業試験場（作物部特用作物第2研究室）で、1950年（昭25）にケニヤより輸入した種子を翌年から育苗し、1958年（昭28）に個体選抜を行った栄養繁殖系統である。1958年（昭33）に、北海道立農業試験場上川支場（畑作課、士別市）圃場に定植し、以後生産力検定試験を実施してきたものである。1962年（昭37）優良品種に決定し「わっさむ」と命名した。

特性概要 1.春期及び収穫後の萌芽勢は「北海1号」に比べ旺盛で、終始葉色も濃い。

2.開花期は大体「北海1号」と同期であるが経過年数が増すと幾分早くなる傾向がある。

3.茎数はやや多い程度であるが、分枝数が多いので着花数は著しく多い。

4.草丈は「北海1号」に比べ10cm内外高いが倒伏は比較的少ない。

5.定植後2年目から3年目の乾花収量は、「北海1号」に比べて安定して多収である。

6.ピレトリン含有量は「北海1号」より幾分高い。

7.病害並びに冬損率は経過年数は浅いが「北海1号」と大体同程度とみられる。

栽培適地と奨励態度 従来本道の除虫菊の栽培は傾斜地の掠奪栽培によって、その有利性を保持してきたのであるが、このような栽培では、土壤浸蝕がはげしく、定植後4年くらいを経過すると、収量は急減し、宿根性雑草が繁茂してきて労力を多く要するようになる。栽培上留意を要する点を挙げるとつぎのとおりである。

1. 定植にあたっては基肥として10a当り堆肥1~1.5t 硫安11kg, 過石26kg, 豆粕(高価ではあるが、除虫菊に対しては特効的に作用する)11kgを基準として施用のこと。
2. 吸肥性が高いので、収穫直後に10a当り硫安11kg, 過石26kg, 豆粕11kgを追肥すること。
3. 収穫に際して低刈りし過ぎると欠株の原因になるから花梗を刈るようにすること。
4. 収穫年数は3~4年程度を限界として輪作を行い、収量と地力の減退を防ぐこと。

試験場名	開花期	収穫期	収穫期における				10a当り		ピレトリン含有率	試験年次
			草丈	茎数	分枝数	着花数	乾花重	茎重		
上川農試	7.3	7.9	76.1	64.5	46.0	120.7	152.0	171.7	1.47	1960~61年 株令2~3年平均
北海道農試	7.1	7.14	77.4	68.2	26.1	94.3	(23.4) ^K	(56.5) ^K	1.50	1959年 3年株

北海道農試()内は株当り収量(g)を示す。

4. ラベンダー

(1) ようてい (早咲1-3)

来歴 「ようてい」は、1937年(昭12)曾田香料株式会社がフランスから種子を導入して系統選抜したものである。1960年(昭35)から北海道立農業試験場において適応性を検定し、1964年(昭39)優良品種に決定し、「ようてい」と命名した。

特性概要 1. 早生種で、在来種に比べ開花は整一である。

2. 花茎はやや長く、花茎姿勢はやや直立である。

3. 葉色は緑で、花色はやや淡紫である。

4. 花茎収量は中程度であるが、収油率が極めて高く、油質は良好である。

栽培適地と奨励態度 現在栽培されている各地に適する。挿木苗の活着が劣るので増殖に際して十分注意を要する。また計画より余裕をつけて挿木をする必要がある。

試験場名	開花始	収穫期	収穫期における			10a当り		収油率	試験年次
			草丈	花茎長	1m当り花茎数	花茎重	油重		
北海道立農試	7.5	7.18	61.4	30.6	1.170	645	4,518	0.69	1960~1963

(2) おかむらさき (遅咲1—4)

来歴 「おかむらさき」は、1937年(昭12)曾田香料株式会社がフランスから種子を導入して系統選抜したものである。1960年(昭35)から北海道立農業試験場において適応性を検定し、1964年(昭39)優良品種に決定し、「おかむらさき」と命名した。

- 特性概要 1.中生種で、在来種に比べ開花は整一である。
 2.花茎は極長で花茎姿勢は半平伏先端曲である。
 3.葉色は濃緑で光沢がある。花色はやや濃紫である。
 4.花茎収量はやや多く、収油率は中程度で、油の品質が良好である。

栽培適地と奨励態度 現在栽培されている各地に適し、在来種に置換えて奨励する。本ば定植に際し、苗木の根に肥料が直接付着すると枯れやすいので注意すること。

試験場名	開花始	収穫期	収穫期における			10a 当り		収油率	試験年次
			草丈	花茎長	1㎡当り花茎数	花茎重	油重		
北海道立農試	月.日 7.8	月.日 7.20	cm 71.6	cm 39.1	本 1.131	kg 702	kg 3,751	% 0.56	1960~1963

(3) はなもいわ (中咲2—2)

来歴 「はなもいわ」は、1937年(昭12)曾田香料株式会社がフランスから種子を導入して系統選抜してきたものを、1959年(昭34)以来北海道立農業試験場において適応性を検定した。1967年(昭42)優良品種に決定し、「はなもいわ」と命名した。

- 特性概要 1.「ようてい」より5日遅く、「おかむらさき」より1日早い中生種である。
 2.花茎は中間で花茎姿勢はやや直立である。
 3.葉色は淡緑で白色の短毛があり、花色は極淡紫である。
 4.花茎収量は定植後1~2年は「あかむらさき」に劣るが、3~4年目以降は「おかむらさき」より増収する。収油率は「ようてい」「おかむらさき」より劣る。

栽培適地と奨励態度 現在栽培されている各地に適する。定植後の生育が緩慢であるから育苗に注意して良苗の育成に努めること。

試験場名	開花始	収穫期	収穫期における			10a 当り		収油率	試験年次
			草丈	花茎長	1㎡当り花茎数	花茎重	油重		
中央農試	月.日 7.10	月.日 7.22	cm 44.4	cm 21.6	本 485	kg 468	kg 3,843	% 0.61	1965~1966

5. 亜麻

(1) ヒブラ(Fibra)

来歴 1945年(昭27)～1961年(昭36)にかけてオランダで交配、育成されたもので、1961年(昭36)にオランダの優良品種に登録された。1962年(昭37)オランダとの種子交換により導入され、以後1964年(昭39)までの3カ年、生産力および特性検定を行って、1965年(昭40)優良品種に決定し、農林省に新品種「ヒブラ」(あま導入2号)と命名、登録された。

特性概要 この品種に対して、オランダにおける特性の評価は、白花で生育は緩慢で晩熟、茎長は長く強靱であり多収、繊維歩留は非常に高く、品質は良好で種子収量は低い、さび病およびピシウムに抵抗性があるが早魁には弱いとされている。北海道における特性は次のとおりである。

1. 「ヒブラ」の生育は緩慢で、「ウィーラ」より生育初期から中期にかけての草丈は低いが、開花期前後から伸長が旺盛となり、収穫期の草丈は「ウィーラ」より高い。
2. 開花始は「ウィーラ」より約3日遅く、収穫期は1～2日おそい。
3. 茎収量は「ウィーラ」と同程度かやや多収であるが、子実収量はやや少ない。施肥量に対する反応は「ウィーラ」より鈍い。
4. 繊維歩留は「ウィーラ」よりやや良い。
5. 耐倒伏性は「ウィーラ」と同程度かやや強い。ただし十勝においては挫折現象がみられる。
6. さび病抵抗性は「ウィーラ」より強いが、立枯病に対しては、南系かその他の環境条件により異なる。
7. 花色は白色、葯は青色で「ウィーラ」と同じである。千粒重は「ウィーラ」より僅かに軽い。
8. 収穫期近くに急激に黄熟し、色上がりがよく茎品質は良い。

栽培適地と奨励態度 「ウィーラ」に代って全道一円に適する。

1. 立枯病の抵抗性は場所間に差はあるが「あおやぎ」のように強くないので、輪作年次に注意を要する。
2. 施肥に対する反応は、「ウィーラ」より鈍いが大差はなく、施肥量は「ウィーラ」に準じてよい。
3. 初期生育が緩慢で、かつ熟期がやや晩いので、つとめて早期播種すること。

試験場名	開花始	収穫期	生育日数	収穫期における			10 a 当り		1,000粒重	繊維歩留	試験年次
				草丈	茎長	葉の太さ	子実重	乾茎重			
北海道農試	月. 日 6. 27	月. 日 7. 30	日 95	cm 80.4	cm 69.1	mm 1.43	kg 109	kg 489	kg 4.8	% 21.1	1962～1964
十勝農試	6. 30	7. 28	94	94.9	84.6	1.63	48	532	4.8	18.0	"
北見農試	7. 5	8. 2	94	89.7	79.3	1.88	51	594	3.8	20.5	"

(2) レイナ (Reina)

来歴 1955年(昭30)～1962年(昭37)オランダのCentraal Bureauにより交配育成され1962年(昭37)オランダの優良品種に登録された。北海道には1962年(昭37)に導入され、以後1965年(昭40)までの4年間、北海道農業試験場、北海道立十勝農業試験場および北海道立北見農業試験場で生産力および特性検定を行った。1966年(昭41)優良品種に決定し農林省に新品種「レイナ」(あま導入3号)と命名、登録された。

特性概要 オランダにおける本品種の特性は白花で「ウィーラ」に似るが、早熟である。茎は長く強靱多収であり、繊維歩留が高く品質は良い。種子収量が多く、さび病に強いがピシウムに弱い。早熟には強いとされている。北海道における特性は次のとおりである。

1. 初期生育は「ウィーラ」と同程度かやや早いが取穫期の草丈は「ウィーラ」より劣る。
2. 開花始および熟期は「ウィーラ」とほぼ等しい。
3. 茎収量は「ウィーラ」より僅かに少なく、子実収量はやや多い。
4. 繊維歩留は「ウィーラ」より約1%高いが繊維収量は「ウィーラ」と大差なく、繊維の品質は「ウィーラ」並で「ヒブラ」よりは劣る。
5. 耐倒伏性は「ウィーラ」と同程度かやや強い。
6. 立枯病に対しては弱いが、さび病抵抗性は「ウィーラ」より明らかに強い。
7. 花色は白、葯は青色を呈し、子葉の大きさは「ウィーラ」と大差はない。
8. 子実千粒重は「ウィーラ」よりやや重い。

栽培適地と奨励態度 「ウィーラ」と同じく全道一円に栽培が可能であるが、「ウィーラ」に比べて生育が全般的に早く、倒伏抵抗性がやや強く、またさび病抵抗性が強いことから、播種期または生育の遅延する山麓および沿岸地帯やさび病の多発地帯に適する。

一般栽培上は「ウィーラ」に準じてよいが、立枯病に対しては「ウィーラ」と同様に弱いのて、7年以内の短期輪作はさけるべきである。

試験場名	開花始 月 日	取穫期 月 日	生育日数 日	取穫期における			10a 当り		1,000 粒 重 g	繊維歩留 %	試験年次
				草丈 cm	茎長 cm	葉の太さ mm	子実重 kg	乾茎重 kg			
北海道農試	6.24	7.29	94	72.5	62.4	1.39	116	446	5.1	17.8	1962～1964
十勝農試	6.28	7.26	91	86.6	75.3	1.61	63	498	4.5*	17.5	1962～1965
北見農試	7.3	8.2	94	85.3	72.5	1.85	55	522	3.8	20.0	1962～1964

* 1,000粒重、十勝は1962年1ヶ月のみ

6. なたね

(1) タイセツナタネ (北系87号)

来歴 「タイセツナタネ」は、1952年(昭27)北海道農業試験場で「ハンブルグ1号」より選出育成を図ってきたものである。1957年(昭32)以降3カ年にわたり、道内試験機関において生

産力検定試験を行い、同時に現地試験により地方適否を検討した。1961年（昭36）優良品種に決定し、農林省に新品種「タイセツナタネ」（農林33号）と命名、登録された。

特性概要 1.草型はⅣ型（主茎の発達が旺盛で第1次分枝は稀に主茎の基部に発生し、秋播性程度が高い）である。

2.葉色は濃緑色を呈し、生育は旺盛である。

3.「ハンブルグ1号」より長稈で、稈の太さは中位である。

4.分枝の発達は著しく良好で、莢は長く、一莢結実数が多い。子実は黒色の大粒で品質は良好である。

5.成熟期は「ハンブルグ1号」より4日程早い。

6.冬枯れおよび菌核病に対する抵抗性が強く、「ハンブルグ1号」に比べ常に安定した多収を示す。

7.含油率は「ハンブルグ1号」よりいく分高い。

栽培適地と奨励態度 冬枯れ抵抗性、菌核病抵抗性が強いので、北海道の空知以北の冬枯れ多発地帯および道南の菌核病多発地帯に好適する。少肥にも向き適応性は広いが、安全多収を期するため冬枯れ防止対策は従来通り実施することが望ましい。

試験場所	開花期	成熟期	成熟期における			10a当り 子実重	1ℓ重	1,000 粒重	含油率	冬損歩合	試験年次
			草丈	穂長	1穂莢数						
北海道農試	月.日 5.22	月.日 7.21	cm 156	cm 33	個 13	kg 228	kg 661	kg 5.7	% 49.21	% 17.8	1956～1959
空知支場	5.30	7.24	142	33	17	234	663	5.8	—	29.3	1957～1959
原原種農場	5.23	7.24	139	—	—	218	662	5.9	—	—	1957～1959
岩宇 園芸試験地	5.24	7.20	162	—	—	367	649	5.7	—	—	1958～1959

(2) イワオナタネ(MR1号)

来歴 「イワオナタネ」は、1954年（昭29）厚田郡厚田村望米で栽培されていた「岩内」の集団より個体選抜し、系統を育成したものである。1955年（昭30）より北海道農業試験場において、特性調査を行い、さらに1957年（昭32）以降3カ年にわたり道内試験機関において生産力検定試験を行い、同時に現地試験により地方適否を検討し、1961年（昭36）優良品種に決定し、「イワオナタネ」と命名した。

特性概要 1.草型はⅣ型（主茎の発達が旺盛で第1次分枝は稀に主茎の基部に発生し、秋播性程度が高い）である。

2.越冬前の葉色は濃緑色を呈し、葉縁に多くの細かい欠刻を有する。

3.生育は極めて旺盛である。長稈で分枝の発達が良く、枝稈は太く、とくに強剛で倒伏し難い。

4.莢は極めて長く、一莢結実数が多い。子実は「ハンブルグ1号」より小さく中粒であるが黒色整粒で良質である。

5.秋播程度は極めて高く、抽苔も遅く、成熟期は「ハンブルグ1号」より4～5日、「岩内」より2～3日おくれる極晩生種である。

6.耐冬性で、菌核病に対する抵抗性が強く、多収で含油率も高い。

栽培適地と奨励態度 枝稈がとくに強剛なので、倒伏しやすい地帯および多肥栽培に適する。また菌核病抵抗性が強いので道南地方の同病多発地帯に適する。耐冬性は「岩内」程度であるから冬枯れ防止対策には従来通り注意を要する。

試験場所	開花期	成熟期	成熟期における			10a当り 子実重	1ℓ重	1,000 粒重	含油率	冬損歩合	試験年次
			草丈	穂長	1穂莢数						
	月.日	月.日	cm	cm	個	kg	g	%	%		
北海道農試	5.26	7.29	160	36	14	224	652	4.8	49.27	21.8	1957~1959
空知支場	6.3	7.29	140	35	19	242	656	4.8	—	33.8	1957~1959
原原種農場	5.25	7.27	140	—	—	239	653	5.0	—	—	1957~1959
岩内 宇園芸試験地	5.28	7.25	172	—	—	345	646	5.2	—	—	1958~1959